

イネ縞葉枯病の防除について

イネ縞葉枯病による減収を防ぐため、地域ぐるみでヒメトビウンカの防除を行いましょう。

イネ縞葉枯病とは

- ・ヒメトビウンカが媒介する病気です。ウイルス病なので発病後の治療はできません。
 - (A) 感染すると、葉に縞状の斑紋が生じます。
 - (B) 分けつ期には葉先がこより状に垂れ下がり枯死します。
 - (C) 出穂期には被害茎の穂が出すくみ、不稔や奇形となるため減収します。
- ・麦栽培地の近くや二毛作地帯で多く発生します。



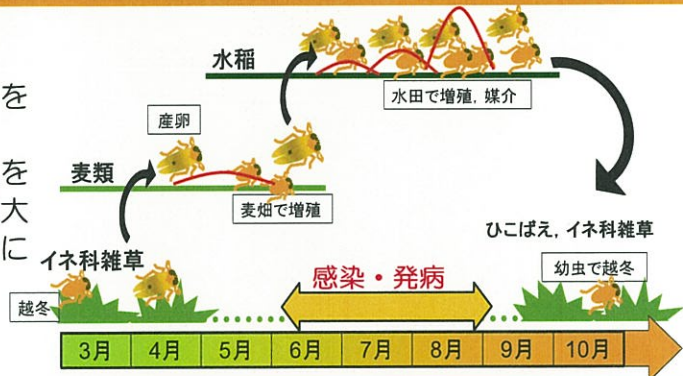
写真：
茨城県農業総合センター
農業研究所 病虫研究室



ヒメトビウンカ成虫（雌）
（体長3～4mm）

イネ縞葉枯病の感染

- ・ウイルスを持ったウンカ（保毒虫）がイネを吸汁することで感染します。
- ・さらに感染株を吸汁したウンカがウイルスを獲得し、健全株を吸汁することで感染が拡大します。このウイルスは次の世代のウンカにも引き継がれます。
- ・種子でのウイルス伝染はありません。



防除するには

- ・ヒメトビウンカの防除を行いましょう

【薬剤による防除】

- ・ヒメトビウンカに効果のある薬剤の育苗箱処理で、発生を減少させることができます。（ウンカは吸汁することで薬剤を摂取し死亡するので、軽度の発病はあります。）
- ・地域全体でヒメトビウンカを減らすため、抵抗性品種にも育苗箱処理を行いましょう。
- ・本田での防除は、幼虫発生時期（6月中～下旬）に行いましょう（毎年の気象条件で違ってきますので注意して下さい）。出穂期以降の防除では、イネ縞葉枯病を抑える効果は低くなります。

【耕種的防除】

- ・イネ縞葉枯病の抵抗性品種を作付しましょう。
- ・早めに秋耕を行い、再生イネを処理しましょう。
- ・畦畔の除草により、ヒメトビウンカの越冬場所を減らしましょう。
- ・前年の被害が多い場合には、疎植（苗の少ない植え方）はやめましょう。

【小麦畑での薬剤による防除】

- ・ヒメトビウンカの増殖場所となる小麦畑での薬剤防除を、5月中～下旬に行いましょう（収穫前日数に注意）。



地域が一体となり、防除に取り組む事が重要です！